



主力データセンターを北九州に移設 クラウドの柔軟性を最大限に活用

グローバルで使用する基幹システムをabsonne上に構築

背景

BCP(事業継続計画)などへの対策として、プライマリデータセンターを自社から他所に移設する検討をしていた。立地やコストに加え、多様なクラウドサービスを利用できることも条件に加えて検討を進めた。



矢崎総業株式会社
ICT推進室
インフラ運用部長
古川 広輔氏

ソリューション

国内外13カ所の最終候補の中から、北九州にある新日鉄住金ソリューションズ(NSSOL)の新鋭データセンターを選定した。決め手は、多様な使い方ができるNSSOLのクラウドサービスabsonneと、パブリッククラウド連携だった。

成果

北九州への移設によって事業継続リスクを抑えるとともに、クラウドサービスabsonneを利用して、より柔軟なインフラを整備した。基幹系を含む新規システムはすべて新しいインフラ上に構築し、既存システムも順次移行する。

三つの要因からプライマリデータセンターの移設を検討

自動車用ワイヤーハーネスで世界トップクラスのシェアを持つ矢崎グループ。その中核を担う矢崎総業は、静岡県裾野市にある同社プライマリデータセンター(DC)の移設を2014年から検討していた。理由は災害対策の強化、24時間365日稼働、および今後のクラウド活用のためだ。プライマリDCが満たすべき要件を見直した結果、既存環境には可用性や地理的条件に事業継続の残存リスクがあった。また、法定停電などにより24時間365日稼働ができず、グローバル化するシステムの運用要求も満たせていなかった。さらに今後、ITリソースの調達を柔軟にするには多様なクラウドサービスの活用が必須と考えていたが、複数のサービスと個別契約するのではなく、用途に応じて必要なサービスを選べる統合的な利用環境の実現を模索していた。

13の最終候補からNSSOLの北九州データセンターを選択

矢崎総業は、通信のレイテンシー、電力供給や政治関連の安定度、災害リスク、可用性、コストなどを比較し、移設先の候補を国内外の13データセンターに絞り込んだ。この時点では国内より海外の候補の方が多かったという。

しかし、同社が最終的に移設先として選んだのはNSSOLの北九州データセンターだった。総合的に見てコストが安価だったことに加え、柔軟にITリソースを調達できるクラウド環境を高く評価した。一つはNSSOLのマネージド・クラウドサービス「absonne(アブソンヌ)」であり、もう一つはデータセンター内外の複数のクラウドサービスに安全にアクセスできる「マルチクラウド環境」だ。矢崎総業は今後、ITリソースの調達方法としてabsonneをはじめとするクラウドサービスを積極的に活用する。

インフラを再整備、より柔軟で幅広いサービスが提供可能に

2015年から始まったプライマリDCの移行準備作業は順調に進み、まず新規開発システムを中心にプライマリDCで稼働させている。これにより、矢崎総業は事業継続の残存リスクを軽減し、24時間365日稼働のシステム要件もクリアした。

同社のICT推進室インフラ運用部は以前から社内向けのサービスとして仮想サーバーやストレージを提供してきたが、今回、absonneの導入をきっかけにそのインフラサービスを再整備している。リソースを容易に増強できるようになり、バッチジョブの実行環境や監視といった新サービスも加えた。また、運用業務もabsonneに合わせて再設計し、改善したうえでNSSOLにアウトソースしている(本誌2017 Autumn号に関連記事)。今後は、BCP環境の再構築をNSSOLとともに進めていく考えだ。

Key to Success

矢崎総業は、まず全世界を対象にプライマリDCの移設先を選定したという。ICT推進室インフラ運用部長の古川広輔氏は、「選定にあたって、最初に国を絞り込みました。今後の社内システムは、アジア全域の拠点での利用が増加します。これら拠点間の通信レイテンシーをすべて測り、データセンターがどの範囲にあればレイテンシーを許容できるのか、地図上に描いていきました。この段階で移設先をアジア12カ国に絞りました」と話す。

さらに通信回線、電力、政治の安定性、災害リスクなどを評価し、各国内の地域を絞った。「この過程で残った海外2地域と国内4都道府県にある全データセンターを調べ、要件を満たす候補にRFQ(見積依頼書)を出しました」(古川氏)。13の最終候補の内訳を見ると、「地震が多いことから日本国内の移設先候補は少なかった」という。だが矢崎総業は、最終的にNSSOLの北九州データセンターを選んだ。

NSSOLの北九州データセンターが唯一、すべての要件を満たす

選定のポイントは「コスト」と「データセンターで利用できるクラウドの柔軟性」だった。

コスト面で、アジアのデータセンターには安価なイメージがあるが、北九州データセンターと比べて大きな差はなかったという。古川氏は「プライマリDCとしての要件を満たすデータセンターは、海外でも案外コストが高い。通信料を含むコスト順に並べ直すと、北九州データセンターが一番安いグループに入っていました」と評価する。

コストと並び、矢崎総業が「クラウドの柔軟性」を重視した理由は、でき

るだけ多くのシステムが移行できる柔軟なインフラをクラウド上に用意することで、ITリソースの調達を容易にし、運用負荷を下げたいと考えていたからだ。「同一のデータセンターでハウジングもクラウドも提供しており、さらにパブリッククラウドとも連携できる。これらの要件をすべて満たしていたのは、唯一、NSSOLの北九州データセンターだけでした」(同)

社内向けインフラサービスをオンプレミスからabsonneへ

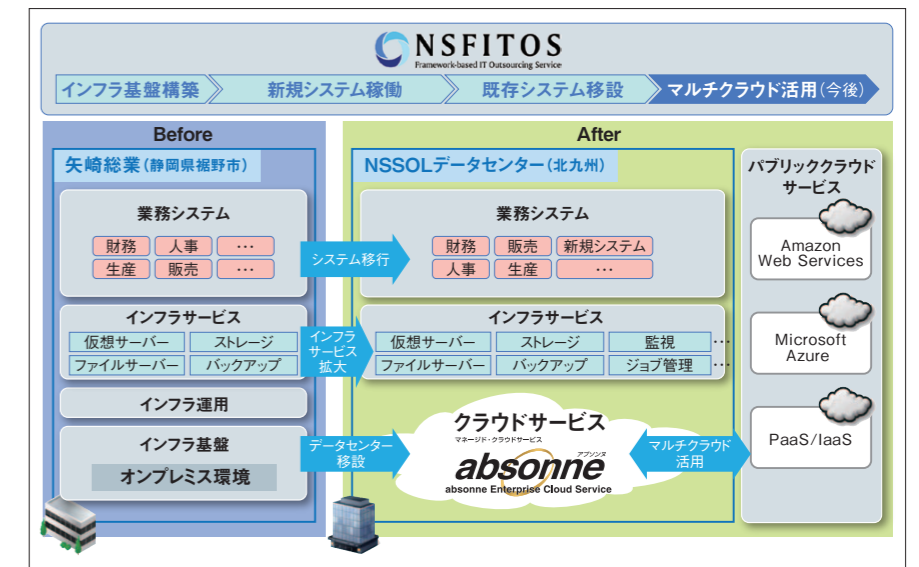
「インフラ運用部は社内クラウド事業者のような役割を果たしていて、社内システムで使用する仮想サーバーやストレージは、基本的にこの社内クラウドサービスを通して提供しています。ただ、その基盤となる自社リソースをタイムリーに増やすのは難しく、

増やせば増やしたで運用の負荷も大きくなっていきます。これを解決するため、リソースそのものを信頼できる外部のクラウドサービスから調達したいと考えていました。今回、absonneの活用により、社内クラウドサービスの運用改善と同時に、サービスラインアップも拡充できました」(同)

従来の社内サービスでは、仮想サーバーで対応できないような要望には応えられなかった。しかし、そうした規格外の要望にもサービス提供できることがabsonneの特長の一つである。古川氏は「仮想サーバーだけでなく、物理サーバーもabsonneから調達して、社内サービスとして提供しています」と例を挙げた。

将来、パブリッククラウドを“適材適所”で使い分けることも想定していた。「その点、absonneはAmazon Web ServicesやMicrosoft Azureと接続しています。自社で整備する必要がないのは大きなメリットです」(同)

■矢崎総業のプライマリデータセンター移設



■コアテクノロジー

ハイブリッド・クラウドインフラ、ITアウトソーシング

■システム概要

- サービス拠点: NSSOL北九州データセンター ●クラウドサービス: absonne
- ITアウトソーシングサービス: NSFITOS(エヌエスフィットス)